

Title	ウヰリアム、モリスの文明觀と藝術觀と勞働觀
Author(s)	河田, 嗣郎
Citation	經濟論叢 (1920), 10(1): 28-46
Issue Date	1920-01-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/127616
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京 叢論濟經

號一第 卷十第

行發日一月一年九正大

論 說

温情主義と労働問題……………

法學博士

田島 錦治

手數料決定上の二問題……………

法學博士

神戶 正雄

モリスの文明觀と藝術觀と労働觀……………

法學博士

河田 嗣郎

所帶統計概説(二完)……………

法學博士

財部 靜治

キヤナンの富の概念に就きて(一)……………

法學士

石川 興二

時事問題

智識階級の解散……………

法學博士

戸田 海市

朝鮮の財政獨立に就て……………

法學博士

小川 郷太郎

雜 錄

生活費の組織的研究の必要……………

法學博士

山本美越乃

判任官生活の實狀……………

法學士

汐見 三郎

獨逸大銀行の取引所仲立業に就きて……………

法學士

大森 研造

我國の新ブルジョア階級の成立(二完)……………

法學士

圓谷 弘

カンニンガム博士逝く……………

法學士

本庄榮治郎

京都帝國大學經濟學會第一回講演會記事……………

ウヰリアム、モリスの文明觀と

藝術觀と勞働觀

河 田 嗣 郎

緒 言

ギルド、ソシアリズムに關する諸家の見解に就いては、本誌上に數回之を紹介して置いた。茲には又更にペンチー氏の思想に對して大いなる影響を與へ、美術工藝の復活と勞働者の自主的勞働制の樹立とを行はんとする其の主張に對して、理論的根據を與へ、又美的憧憬を起さしめて、其の主張の生れ出づるを扶けたりと思はるゝウヰリアム、モリス氏の藝術觀と、引いて生せる勞働觀とを窺つて見たいと思ふ。

モリス氏は昔時の美術が人間日常の生活と離るべからざる關係を有し、特に藝術と手工とが一致したりし状態が、漸次に變化して、美術は何となく美術の爲めの美術となり、手工は漸次に其の藝術的要素を失ひて單純なる勞働と化し、美術一般の大いなる衰頽を齎せると同時に、手工は勞働として漸次に手段化せられ、從て勞働は人生の喜悅たらずして苦痛となり、たゞ方便と營利との爲に行はるゝに至れる近時の状況を慨歎して、勞働を目的化し、手工と藝術との一致を再來

せしめ、美術と日常生活との關係をして、今一度磨瑯不可離のものたらしめんと欲した。而して氏の希望は單に懷かれたる希望たるに止まらずして、終に『藝術と手職運動』(Arts and Crafts Movement)として實際的發動を見るに至つたが、其の運動は不幸にして終に多くの効果を齎することなくして終つた。併し氏の藝術觀と勞働觀とは、前述の如くベンチー氏等の思想に大いに影響する所あり、ベンチー氏のローカル、ギルヅに關する主張の如き、其の思想の根柢に於てモリス氏に負ふ所甚だ渺からざるものあるを思はしめる。斯くてモリス氏の藝術觀及び勞働觀より出でたる社會主義思想は、今日に至つて尙ほ活きたる力を發揮しつゝある次第である。

モリス氏の思想は多くは韻文の形に於て傳はつて居るが、其の講演集に於ても、吾等は明瞭に氏の思想を窺ふことが出来るのである。而して氏の社會主義的理想を描ける *News from Nowhere* は最も廣く知られて居る。併し今氏の思想を知らんが爲めには、其の藝術觀を明白に述べたる *Hopes and Fears for Art* を見るを最も適當なる道とする。此の講演集中に於て、氏は藝術と社會組織との間に存する關係を明示して居るのである。吾等が此所に傳へんとする所の氏の主張も、主として之に據る次第である。尙ほ *Dream of John Ball* に於ても、現時の金儲專一の時代に對する反抗と、眞實に自由なる人間の生甲斐ある生存の何物なるかを知ることが出来る。又彼の *The Pilgrims of Hope* に於ては、普通人の向上努力に依りて造らるべき、佳き世界に對する大いなる

渴仰を、潑刺たる詩文として味ふことが出来る。

一 現代の文明 (其の功績と害毒)

モリス氏の美術と人生との關係に就きての思想を尋ね、引きて其の勞働觀を窺はむが爲めには、先づ氏の現代文明に對する見地を披いて見なければならぬ。

氏は現代の文明を以て古き文明を破壊すると同時に、美術を破壊し、人生をして大いなる喜の發露たらしめず、漸次に事務化し、商業化し、一般的に生存の美を打亡ぼしつゝあるものと考ふる。而して氏の考に依れば、歴史は日常藝術の經緯に依つて編まれたるものと見ることが出来るのであつて、文明の榮えたる時代は裝飾美術の榮えたる時代で、其の職人は多くは抑壓せられたる人々なれども、彼等は技藝の上に於ては自由であつた。決して現時の勞働者の如く、其の人格の上にも、其の仕事の上にも、束縛せられ抑壓せられたる者ではないとするのである。

モリス氏は謂ふやう

昔時には現今よりも多くの偉大なる思想家があつたとは云へぬかも知れぬけれど、現時に於けるよりも遙かに多くの幸福なる仕事師^{ワーカーマン}があつた。此等の人々は獨創的な思想を表現した。又表現せずしては在り得なかつたのである。従て其の製作品には味があり、又美しかつたのである。

- 1) A. J. Penty, The Restoration of the Gild System, London 1906, pp. 77—ditto, Old World for New, London 1917, pp. 104— G. D. H. Cole, Self Government in Industry, London 1918, p. 121.
- 2) William Morris, Hopes and Fears for Art, London 1903, pp. 6-9; p. 75.

然るに今や斯かる一船的なる民衆の爲めの民衆の藝術は漸次に衰頹して、殆んど睡死せるが如き状態である。此の状態は聴て醒めて大いなる發展の氣運に向ふか、然らざれば全く死滅してしまふの外なき危險に瀕して居る。

されば昔時に在つて美しかつた職人の製作品は、二種に區別せらるゝに至り、美術的な作品と非美術的な製作品とに分たることゝなつた。斯くて今人は其の日常に使用する什器類に於て、悉く美術的な製作品を見出さむことは難く、美術的なものは之を美術品として殊更に求めなければならなくなつた。

洵にルネイッサンス時代の末葉以來、美術は漸次衰運に向ひ、近代に於ては特に急速なる速度を以て衰退し、曾ては美術的な製作品たりし物も、終に機械を以て大量的に生産せらるゝに至り、然かも其の機械は人と名けらるゝものたるに外ならざる状態をすら見るに至つた。斯くて今や所謂文明國の人々は、曾ては美術が民衆の爲めに民衆に依りて作られ、之を作りたる者も之を用ゆる者も、共に大いなる喜を感じたりし時代のあつたことは、全く之を忘却せる状態を呈するに至つた。

斯く考へ來つてモリス氏は現時の文明が一面經濟的な大いなる發達を齎せると同時に、それが舊時代の善美なるものを破壊して、殺風景なる商工主義の全盛を産み出せる様を述べて、之を痛

惜活動するのである。其の説く所は次のやうである。

十九世紀は寔に商業の世紀 Century of Commerce と呼ばるゝ時代である。此世紀が爲し遂げたる事業は決して蔑視すべきものではない。それは多くの謬見を打破して、從來はたゞ徐々に教へられたるに過ぎなかつた多くの事柄を急速に教へた。それは多くの人々をして自由の生活に入るを得せしめた。此等の人々は他の時代に於ては、肉體的に又は精神的に又は身神共に奴隸として生くるの外はなきものであつた。又それは全世界に完全なる平和と正義とを普及せしむることは出来なかつたにせよ、併し大いに力強く正義と平和とを促進せしめたことは、之を争ふことが出来ぬ。洵に十九世紀の爲し遂げた事業は、善き事柄で又澤山の事柄であつたが、唯併し乍ら其の事業は如何にも粗末に爲し遂げられた。無鐵砲は凄じき勢を以て行はれた。盲目的猪進も大いなる速度を以て行はれた。其の結果として二十世紀は此の無鐵砲の跡始末を爲し、又急ぎたる仕事の遺せる多くの濫費を整へるに、忙殺せらるゝことであらう。

斯るが故に現時に於ては、多くの裝飾美術の如きも、所謂商業主義なるものゝ爲めに打亡ばされて居る。東洋諸國の此種の小美術が、西洋文明特に其の産業主義の侵入の爲めに破壊せらるゝ有様を見よ。現に印度の如きに在りても、英國の支配は遠慮會釋なく其の寶玉細工や、金屬細工や、陶器術や、キヤリコ更紗や、錦欄織や、絨氈織やを打亡ばして居る。そして英國の政府は、

英國民衆の要求を満さむが爲めに、其代りに安價にして、粗惡なるカーペットの類を製造せしめて居る。斯くて今や印度の美術工藝は死滅せんとしつゝある。而してそは實に現代文明の商業主義が爲し遂げつゝある事業である。³⁾

併し文明が暴逆を働きたりとしても、之を救治すべき道は、更に文明を進めるより外、何れにも存せない。

教育は質に於ても、量に於ても大いに増加されなくてはならぬ。十九世紀が『商業の世紀』と呼ばれるべきものであるならば、二十世紀は『教育の世紀』と稱せられなくてはならぬ。然し教育といふものが、學校教育をのみ意味するにあらざることは、絮説を要せざる所であるが、終日勞働に従事して、僅かの時間しか思考を廻らすべき暇を有せざる者を、如何にして教育し得るか。一生涯の中、肉體的にも精神的にも、最も發達すべき時期をば、唯だ働きて過ぐす人々を、如何にして教育し得るか。かゝる人々は、能く彼等をして美術に對する分け前を得せしむるにあらざれば、到底教育することが出來ぬのである。彼等を啓發して文明的ならしむることは出來ぬのである。

文明といへば總ての人々を一齊に導き行く文明でなくてはならぬ。然らざる文明は亡滅に歸するを免れぬのである。而して他の、總ての人々の爲めに存せんとする文明に、其の地位を譲らざるを得ないのである。希臘や羅馬の文明は實に燦爛たる文明であつたけれども、そは奴隸制度の

3) ibid, pp. 49-52; p. 86.

上に築かれたる文明で、實に或種の人々の爲めの獨占的文明であつた。或種の人々の爲めに他の人々が、犠牲にせらるゝ文明であつた。だからしてそれは割合に早く滅び行かなければならなかつたのである。

現今の文明は屢々滓の文明と呼ばれて居る。若し滓の文明たるものが、現時の文明に附隨して離るべからざる性質であるならば、現時の文明は實に毒素を含有するものである。其毒の爲めに早晚滅亡せなければならぬ。而して若し現時の文明が、此上更に進むことなきものならば、現狀まで進み來れることが實に人類の不幸であつて、之迄に進まずに居て呉れた方で仕合であつたのだ。若し現時の文明が此の慘憺たる狀況を脱却して、此の文明の造り出せる總ての人々に對して、生活の喜と尊嚴とを頒ち得せしめぬならば、現時の文明はたゞ之れ組織されたる不條理 *organised injustice* たるに外ならぬ。たゞ抑壓の機關たるに過ぎぬ。然かもそれは俗惡なる樂みと、仕合せとに依りて、支へられたるだけ、之を打亡ばすに難きものである。

然し乍ら、此の不條理は、今や廣く了解せられんとして居る。現時の文明をして、啻に人口の増殖と金儲との爲めのものたらざらしめんとする努力は、是非其功を奏せなければならぬ。之を爲さしむるは即ち吾等の所謂國民的教育の目的とする所である。

而して現時の最も大いなる禍害は人々の大多數が、其の一生の大部分を擧げて、自らは何等の

興味をも感ぜざる労働に、又各自の能力を發揮せしむるに足らざる労働に、特に最も憎むべきは大なる強制に依りて奴隸的に之に従事せざるべからざる労働に、従事しつゝあると之である。然し人々は速かに此の状態から解放せられなければならぬ。今一度人として生存の意義を高唱することが出来なくてはならぬ。然かも能く之を爲さしむるものは、美術の外に存せない。人々を此の奴隸的境遇より解放することは、實に美術の最大の任務で、又其の最も光榮ある任務である。此の目的に向つて進むに依りて美術は、益々自らを清うし、其の完成の勢を促進せしむるに足るのである。而してそれは實に藝術に於ても眞實なるデモクラシーを出現せしむることに對する努力を意味するのであつて、日常普通の仕事を高尚なるものたらしむることを意味するのである。

二 人生と藝術と労働

モリス氏は労働の喜を高唱するものである。而して喜ばしき労働は、自由で束縛や強制を受けない労働でなくてはならぬ。自ら好む所に従ひて労働するに於ては労働は決して苦痛でなく、喜悅である。而して其の労働に於ける喜悅の表象が即ち藝術なのだから、藝術といふものは、たゞ藝術の爲めに存在するのではなく、日常普通の労働も藝術たり得ざる筈はなく、日常普通の製作品が美術品たり得るのである。されば労働を藝術化するといふことは、労働をして自由なる愉快

論説

ウチリウム、モリスの文明觀と藝術觀と労働觀

第十卷 (第一號 三五)

三五

4) *ibid.*, pp. 88-112.

なる勞働たらしむるといふことで、そうすれば藝術は人生としつくり合致したもので、生存の喜は勞働に於て表はれ藝術品として實を結ぶこととなる。そして藝術は少數なる専門家の餘技ではなくて、普通の人々の普通の勞作と合致するのである。然るに近時に於ては藝術は人生日常の行為と離れて段々専門化するに至り、從て漸次人生と没交渉たらんとするに至ると同時に、勞働は漸次に其の愉快を失つて苦痛たるに至りつゝある。之れ洵に現代の文明の齎せる災害であるから、宜しく之を本道に歸らしめて、勞働と藝術との一致を計り、勞働を手段化することなく、人生其物たらしむるに努むることが、現代に於ける要務たらざるを得ぬといふが、モリス氏の思想の根柢を爲す次第である。

斯るが故にモリス氏は謂ふやう

試にサウス、ケンシントンの博物館を訪ねて見よ。其所には如何に多くの驚くべき美しき小美術品が陳列せられてあることよ。然かも此等の驚くべき物は何れも古き時代に於ける日用の必要品であつて、たゞ美術の爲めに作られた美術品ではない。從て其の今日に遺れるものは、決して餘り多數ではない。彼等は日用の什器たるに過ぎざるが故に、當時はたゞ不注意に取扱はれ破壊するも意とせられず、決して珍らしき品ではなかつたから、保存せんが爲めに保存せられたのではなく、今日に遺れるものはたゞ、偶然に壞れずして遺されたるに過ぎぬ。然るにも拘らず、そ

の驚くべく美しきことよ。

尙又此等の小美術品は、なにも名ある美術家に依りて考案せられ、名工が苦心の作として遺せるものではない。普通の指物師や普通の職人 (common fellows) が其日々に於ける尋常の仕事として、之を製作したものたるに過ぎぬ。而して此等當時の職人は、其の製作をば、勞苦としたであらうかと云へば、決してそうでない。仕事に對する十分なる喜悅を以て、満足して之を製作したものである。

更に又之を建築に就て見よ。現今英國の諸所に遺れる多くの古き建築物は、やはり之れ當時或人の住居たり、或は人々の祈禱の場所たりし普通の建物たるに過ぎぬ。之を建築した者は又堂々たる建築の大家といふわけではない。多くは之れ村の大工や村の鍛冶や左官やの手に成れるもので、やはり普通人の普通の所作たるに外ならぬ。然かも其等は今日に於ては、有名なる大家もよく斯くの如きものを建て得ざるほど美はしきものとして遺つて居る。而して古代の普通の製作が、よく斯の如くなるを得た所以のものは、其の製作が喜を以て行はれ、勞働を苦痛とせなかつたからである。

此の最後の點は特に最も注意すべき所である。眞實の藝術を形造る要素は、人が其の勞働に於ける喜を表現せる所に存する。而して人は其の幸福を表現することなしには、其の勞働に於て幸

福なることが出来ぬのであつて、殊に彼が格段に卓越せる或方面の労働に従事する場合に於てそうである。自然の恵の中で最も親切なる恵は之である。何となれば、總ての人は——否、總ての物もそうであるが——労働せなければならぬからである。犬は狩するを喜とし、馬は走るを、鳥は飛ぶを以て喜とし、自然の事物は悉く其の所を得て、自己の働く可き部分を働くを以て喜とする。としか思はれぬのである。

然るに若し人が、己れの天性に合はず、其の希望に叶はず、從て之を好まずして輕蔑する仕事に與はつて労働せなければならぬやうに餘儀なくせらるゝに於てはどうであらうか。其の全生涯は之が爲めに不幸に過ぎ往き、何等の自尊自重なく過ぎ行くの外はない。其の結果として如何なる破滅の表はるべきかを想像して見るがよい。

されば現今の文明國に於ける主要第一の任務は、労働をして總ての人に幸福愉快ならしむるに存する。而して不幸なる労働の量を減ずることに向つて、出來得る限りの事がせられなければならぬ。

然るに現今の實際に於ける労働は如何であるか。大抵は強ゐられたる労働である、之を好むと好まざるに拘らず、之に適すると適せざるに拘らず、生活の必要上止むを得ずして、之に従はなければならぬのが普通である。又之に適し之を好む労働に就き得る者も、其の労働に自由な

い、労働上幾多の條件に於て束縛されたるが爲めに、労働者は其の労働に於て十分なる愉快を見出して、喜むで之を遂行することが出来ぬ。従て今や一般的に労働は苦痛のものとせられ之に従事するを生涯の不幸と考へらるゝに至つた。かゝる労働の下に何で美しきものが生れ得やうぞ。

されば文明の將來に向つて是非とも必要なことは、かゝる壞亂的な労働を制限し結局は全く之を廢除すべき方法を講ずることに、人々其心を砕かなければならぬことである。

成程、數多き労働の中には随分粗野なる労働で、多くの辛勞を要するものもないではない。例へば土を耕し魚網を投ずるが如きは可也力を要する労働であるけれども、之等は決して壞亂的なものではない。之に與ふるに相當なる休憩の暇と自由と十分なる報酬とを以てすれば、人が之を爲して不幸なるものではない。斯るが故に將來廢除せらるべき労働といふは、かゝる種類のものを意味するのではなくて、彼の商工主義の爲めに、たゞ競争的な購買と販賣との爲めに、其の犠牲に供せらるゝ種類の労働を意味するのである。

労働が總ての人に對して愉快なるものたるに至らば、美術は茲に自らに生れ來らざるを得ないのである。何となれば美術は前にも一言したやうに、労働に於ける各自の喜を表象するものたるに外ならぬからである。而して労働が人々に對して一般的に愉快のものとなり、茲に藝術の生れ出づるものなりとせば、其の藝術は人民一般の爲めに人民一般の間より生れ出でたるもので、そ

は之を爲す人に取りて喜悅たると同時に、之を用ゐる人に取りても喜悅である。然かも藝術が、よく斯の如きものたり得むが爲めには、之に當る人々は道德的に大いなるものを必要とするのであつて、その必要は二つある。即ち誠實と生活の簡素と之である。此の兩者は一方を行へば他方は之に依りて自ら到達せらるゝものたるを忘れてはならぬ。即ち生活を簡素にして、慾望少く、奢侈を遠ざくれば、不實を働くの必要は減じ、自尊心は自らに養成されて、責任を以て事に當るとなるは當然だからである。人は富裕となればなるほど益々利慾心が強くなり、他人を排斥し之を陥れても、自ら益々富み且つ榮えんと欲し、心は純一を失ひて、他人と自己とに對して誠實を缺ぐことゝならざるを得ない。富めば富むほど所有慾は熾となり、さかく奢侈は他を奴隸とすることなしには、行はれ難きものである。而して最後に必然なるは正義に對する愛である。之あるに依りて藝術は生きたる力となり、勞働は眞生命を得ることゝなるのである⁵⁾。

三 美術家と職人と勞働者

人生と藝術と勞働とに對する右の如き考よりして、モリス氏は、藝術家なるものは普通の勞働者以外、専門的に藝術の爲めに藝術品を作る者たるべきではなく、勞働者は同時に藝術家であつて、日常普通の勞働が藝術的意義を有し、人生の喜び、行爲の喜として作品が藝術品ならなければな

5) *ibid.* pp. 56-68.

らぬのである。されば美術は日常普通の什器の如きものに於ても生き、之を造る職人は労働者たると同時に藝術家たらねばならぬとする。而して労働者が同時に藝術家たり得んが爲には、其の労働は自由なるもので、之を爲す人々の心に叶ひ、之を爲すことが無上の喜悅たらざるべからざるものなりとするのである。

さればモリス氏は、現今死滅せんとする藝術を救ひ、特に裝飾的な小美術を救ひて、工藝の隆盛を齎さんが爲めには、之に當る人々は、自己の職業及び労働に對する十分なる理解と自尊心とを以て、猛然と時勢に對抗して自家の立場を守り、時勢を導きて之を改善するに努めなければならぬとするのである。即ち氏の考に従へば、裝飾美術に對する救済の道は、之に當る者が、流行を追ひて、少數なる富裕者の甘心を求めて走るに依りては行はれない。之を救はんとならば、其働は自ら其の技術に當る人々より出でて來なければならぬのである。彼等は導かれてはならぬ、導かなければならぬのである。彼等が自ら眞の藝術家たるに至らば、世の流行は彼等に依りて作られ、世は從順に彼等に従ひ來る筈である。而して眞の藝術家たらんとする者は、商業と金儲との毒牙に懼つてはならぬ。自らは腕に何等の覺なくしてたゞ一個の資本主たり商人たるに過ぎざるに、さも職人らしき顔をする者と、眞實に藝術家たる職人と混同せられてはならぬのである。

而して裝飾美術品を製作する職人は、職人乍らも一個の藝術家として、彫刻家や畫家の如きと

相並びて立ち、相提携して進まなければならぬ。之は社會的にも經濟的にも、可也困難なことではあるけれども、之が能く行はれ能はぬといふならば、裝飾的小美術の眞實なる生存は出來難いのである。併し實は此事は決して不可能事ではない。其任に當る人々が眞に藝術家的に生きんとする熱誠を有し、又世間一般が現今埒もなき多くの事柄の爲めに費しつゝある注意を、少しく藝術に向つて費すに至りさへすれば、決して不可能事ではない。

然るに現時の職人一般に涉りて非難すべきことは、彼等が製作品の優秀といふ事の爲めに競争することなくして、安價といふ事の爲めに競争することである。斯くて今や職人は一般的に、利得の爲めのみ生産するの風に傾き、たゞ安價にして賣行の多からんことを希望し、職人としては耻死すべきが如き粗惡なる製作を爲して、之を賣りて、毫も耻とせざる氣風旺なることである。此事に關しては勿論あらゆる階級が其の非難を受くべきであるけれども、之が救治は手職人階級と共に在りさせなければならぬ。蓋し手職人階級は、工業家や中間商人の如く、貪慾なるべき職業柄ではなく、一般社會を藝術的に教育すべき任務は職人の負ふ所で、其の責任を果すに容易ならしむべき組織と秩序とは彼等の中に存するからである。

凡べて吾々は品物を買ふに當りては其の正當なる値を以て買ひ、品物を賣るに當りては、其の品物の質の優良と價格の公正とに對して誇り得ると同時に、又仕事を爲すに當りては、誠實に之

を爲し、製作を爲すに急ぐことなきを得る状態に至らむことは、實に大いなる喜と謂はなければならぬ。十分なる誇を以て悠々と製作に従事するを得るは、洵に人生の最大喜悅であるとせなければならぬ。

如何なる事情が生ずるとも、自己の仕事をは、卓越せるものたらしめんと決心せる職人以外、何物が藝術家であらうか。職人(Workmanship)の名譽を飾るべきものとしては、効果ある勞働に於て、人生の喜悅を言表はす以外に、何の榮譽があるか。之を反對に、劣悪なる仕事と効果なき勞働との中に、何の喜が宿り得やうぞ。公正ならざる利得は、之を積めば積むほど眞實の職人氣質(Workmanship)を傷け、其の進むべき道を塞ぐものたるを忘れてはならぬ。たゞ金が欲しいといふのならば、千年の老樹も惜氣なく之を伐り倒すがよい。古來の美しき建築も之を叩き毀つがよい。そして工場の塵と烟とを以て、麗しき太陽を掩ひ、清き空氣を汚すがよい。そして之は實に現時の商工主義なるものゝ爲しつゝある所である。

藝術は喜ばしき自由と寛仁なる態度とそして眞實とに對して同情を有するものでなくてはならぬ。利己主義と奢侈との下に於ては到底藝術は生永らへ得るものでない。其下に孤立して獨占せらるゝを堪え得るものでない。少數の者に對する藝術を必要とせざることは、恰も少數の者に對する教育を必要とせず、少數の者に對する自由を必要とせざると同様である。

要するに吾々は暇を有たなければならぬ。先づ第一には戰(砲火の戰たるは商業上の戰たるを問はず)より暇を有たなければならぬ。又吾々の思慮を曇らす如き智識より暇を有たなければならぬ。特に金銭に對する貪慾より暇を有たなければならぬ。總て此等の事物より超脱して、暇を有するに於ては、生活方法を改造して今少しく簡易なる生活を營むの狀態に達することゝ相待ちて、吾々は吾々の仕事に對して思考するの暇を有するを得ることゝなり、勞働に對する呪詛は之と共に消滅し、人各々其の所を得て各人幸福になり得べきである。各人はもはや他人の僕婢として之に屈從するの必要もなくなり、又何人も人の主人として之を叱咤する必要もなくなる。各人は愉快に其業を營むことが出来る。而して斯かる狀態の下に於てこそ甫めて高尚なる平民的藝術は生れ出づるを得べきである。斯くて藝術は吾々の住ふ都市をして、現時の殺風景なる狀態より之を救ひて、森林の如く美しく山岳の如く崇高のものたらしむるであらう。そして吾々の仕事は總てよく自然と調和するに至り、合理的で、美麗で、然かも單純で、精神に充ちたるものとなるであらう。⁶⁾

凡て斯かる見地よりしてモリス氏は、藝術の民衆化を主張し、藝術と勞働との合致によりて、藝術をして人生に觸れたる眞劍のものたらしめ、人の力の迸りたらしめ、人生の喜悅の表象たらしむと同時に、勞働は苦痛たらずして愉快たらしめ、各人喜むで之に従ふものたらしめんとする

6) *ibid.*, pp. 14-36.

のである。而して此の状態を造り出さむが爲めには、民衆を一般的に教育する必要があるのである。つて、その事業は職人として労働に當り然かも自由にして獨立なる藝術家たる精神を失はざる者が、之を爲すの外はなく、よく民衆を導きて、先づ精神的改造を行はなければならぬのである。かくモリス氏が労働と藝術との一致を唱へ、労働を現時の商業主義の犠牲たる状態より救ひ、たゞ營利の手段たる境遇より解放して、自主的な人生の目的行爲たらしめんとする思想は、後にペンチー氏等によりて繼承せられ、そのギルド、ソシアリズムの主張に關する思想の基礎を形造るに至つた次第である。而してそれが動すべからざる地歩を有する根柢ある思想たることは、固より今日に於ても變らざる所であつて、労働組織の改造、特に雇傭労働制の廢止よりして、引きて産業組織の改造に及び以て社會生活一般の改造を齎し、文明に一轉化を與へんとすることが、現時に於ける時代的要求であるならば、吾等は先づモリス氏等と共に、労働其者に對する倫理觀を定めてかゝらなければならぬのである。

This is how it befell: a workmate of mine had heard

Some bitter speech in my mouth, and he took me up at the word,

And said: "Come over to-morrow to our Radical spouting-place;

For there, if we hear nothing new, at least we shall see a new face;

He is one of those Communist Chaps, and 'tis like that you two may agree."

So we went, and the street was as dull and as common as ought you could see;

Dull and dirty the room. Just over the chairman's chair

Was a bust, a Quaker's face with nose cocked up in the air;

Of man without a master, and earth without a strife,

And every soul rejoicing in the sweet and bitter of life:

But this word were my very thoughts, and I knew that in faith he spoke,

And I followed from end to end; and triumph grew in my heart

As he called on each that heard him to rise and play his part

In the tale of the new-toled gospel, lest as slaves they should live and die.

(Pilgrims of Hope)